



帝国ホテルの全景（絵はがきから）

表題のタイトルは旅行社がつけた「福岡発着、帝国ホテル二泊三日」のツアーの名前である。我々庶民にとって、日本を代表する帝国ホテルに泊まるることは確かに憧

れかもしれない。新聞広告によると福岡—羽田往復航空券、帝国ホテル二泊と二回の朝食付きで三万九千九百円四万四千九百円。これは定価の部屋代にもならない料金だ。

私は憧れというより、東京という都市とともに一流なものに接するところだ。山口という地方に比べ、東京には刺激を受けることが多い。帝国ホテルはその象徴である。

また、学生時代を過ごした地でもあり、一年に一回ぐらいは東京に行き、友人にも会いたい。幸い家族の協力もあり、今年もそれが実現した。大切なのはお金よりも意欲かもしれない。

「巡礼の道」を書くために時々、海外を旅するが、これとて同じだ。旅行社のFAX会員に登録しているが、これも正規

ホテルで誕生日なんて、リッチね!!」と言う。確かにその一面がなくはない。しかし、みんな五十歩百歩の年金生活。問題はその中で心の後期高齢者にならないように生きるかどうかではないだろうか。

自慢にもならない話だが、帝国ホテルでの二回の誕生日に一度もホテル内のレストランで食事を

したことはない。家族は「せつかくの誕生日だから一回ぐらいは…」と言つてくれたが、自分の金で何万もする食事をしたいとも思わないし、そんなことをすれば体調を崩すだろう。

近くの銀座三越地下食街の弁当と安いワインを求め、部屋で楽しく過るに違いない。

「憧れの帝国ホテル」

（帝国ホテル②）



藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

行動ではなく、飛行機の搭乗便が決まっているだけで、そのほかは自由行動。ツアー実施日を見る限り私の誕生日がある。妻と娘に相談し、今年も

ごすことにしたのである。帝國ホテルで誕生日を過ごすことになったのである。前々回、サムエル・ウルマンの詩「年を重ねるだけでは老いない：理想を失うとき初めて老いる」について書いた。理想、夢、希望を持つ前向きに生きていれば、少なくとも気持ちは若く、いろいろなチャンスに自然に出会うような気がする。



泊まった21階の部屋から=眼下に新幹線が走る